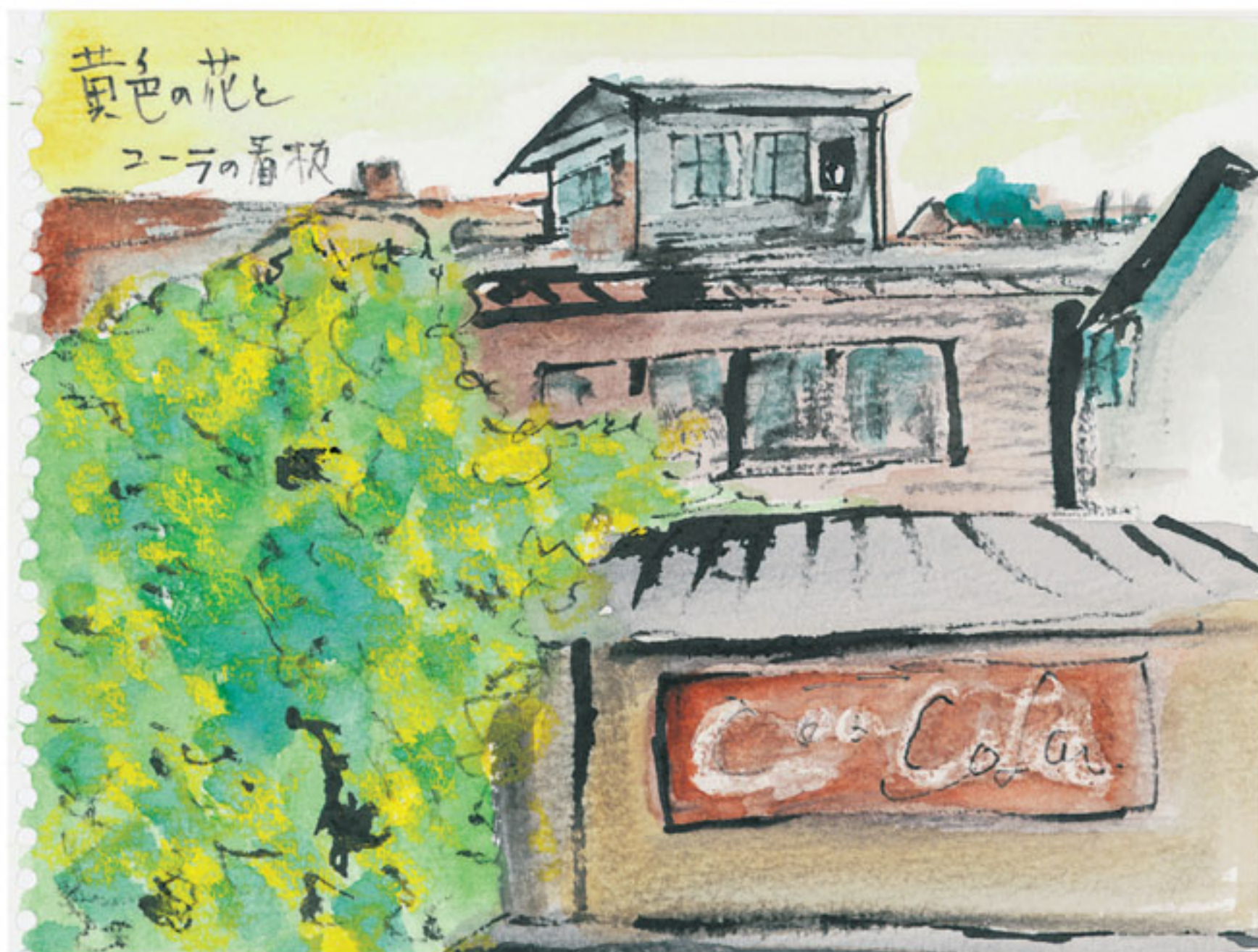


の厳しさは街の姿に刻まれ、訪れる人にとっては「心にしみる」味わいとなる。無責任なようだが、それもまた現実なのだ。

しばらく行くと、鮮やかな黄色が目飛び込んできた。民家の軒先に植えられた木が、秋の日差しの中かで満開の花を咲かせている。

「バラ科の花かな。なんていう名前だろう。家の人は意識していないだろうけど、茶色い壁と青い空にこの色は映えるね」

錆びたコカ・コーラの看板があるところを見ると、かつては商店を営んでいたに違いないその家は、すでに商売替えをしていた。それがまた生活の匂いを感じさせ、なんともいえない趣を



絵 = 地井武男

漂わせていた。

石仏に合掌

朝顔にもペコリ

【福仙寺】日和山大師霊場 日和山公園

海を背に、長崎中央通りから右の丘に登ると日和山公園、左に行くと丘を越えて茶山通りに至る。地井さんは「日和山大師霊場」という看板に導かれるように、福仙寺の階段に足を向けた。階段の脇には朝顔に似た鮮やかな紫色の花が、石垣にはりつくように咲いている。

境内を抜けると、丘に九十九折りの道が刻まれており、そのところどころに小さな祠が置かれていた。これが日和山大師霊場だ。

ブロックで囲われた祠には、それぞれ

「路地で迷うのってすてきだよね。散歩ってというのは、迷うのを楽しむことなんだよ」

初めての下関で あの角を曲がって 昭和の世界へ

【長崎中央通り】

「ボォーッ」

ときおりお腹の底にまで響くような音が聞こえてくる。船の汽笛だ。

JR下関駅から東にのびるメインストリート、国道9号線。街路樹がブロック敷きの歩道に映えるこの道を、地井さんは足取りも軽やかに歩きはじめた。「この音を聞くと、港町に來たなっていう実感がわくね」

仕事でもプライベートでも、なぜか下関は素通りしてきたという地井さん。歴史ある港町という、散歩には絶好の舞台に立ち、見るもの聞くもの、すべてが新鮮に感じるようだ。

こぎれいなビルやマンションが立ち並ぶ9号線から、地井さんはふと長崎中央通りという名の細い脇道に折れた。なだらかにのぼりながら弧を描く道の両側には、木造の古い家が並んでいる。朽ち果てた自動販売機の前に野

菜が無造作に並べられ、お金を入れるための缶がぶら下げられていた。角をひとつ曲がっただけで、平成から昭和にタイムスリップしたかのようだ。

道の左右は小高い丘になっており、その斜面に沿って家並みが続いている。目に映る色のほとんどが木壁の茶色だ。うち捨てられた家も少なくなき、商店や小料理店の看板も見えるが、錆付いたシャッターや破れたカーテンが、廃業して久しいことを物語っている。おそらく、元号が変わる前に置き去りにされたものだろう。

と、ある傾きかけた家屋の二階で、

老夫婦が木枠のガラス窓を入れ替えているのが見えた。止まっていた時計の針が、突然、動きはじめたような感覚を覚える。ともすれば陰鬱な印象を受けるセピア色の街に、あたたかく、やさしい風が吹いたような気がした。

こういう街並みをなんと表現すればいいのだろうと思っていると、地井さんが端的に表現してくれた。

「心にしみる風景だね」

ここに暮らす人たちにとっては、厳しい現実があるに違いない。だが、そ

